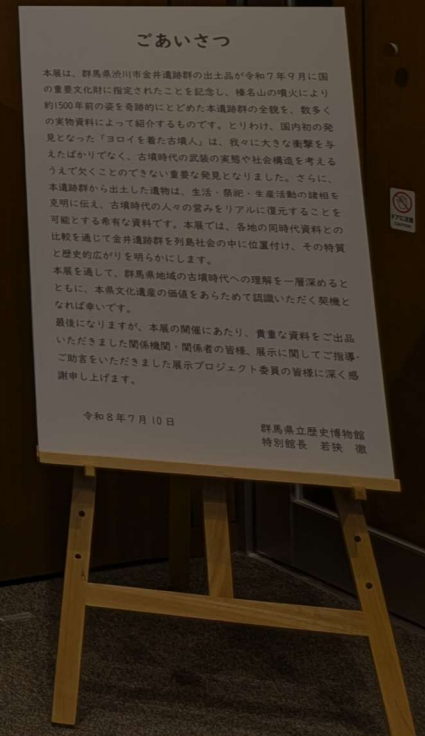
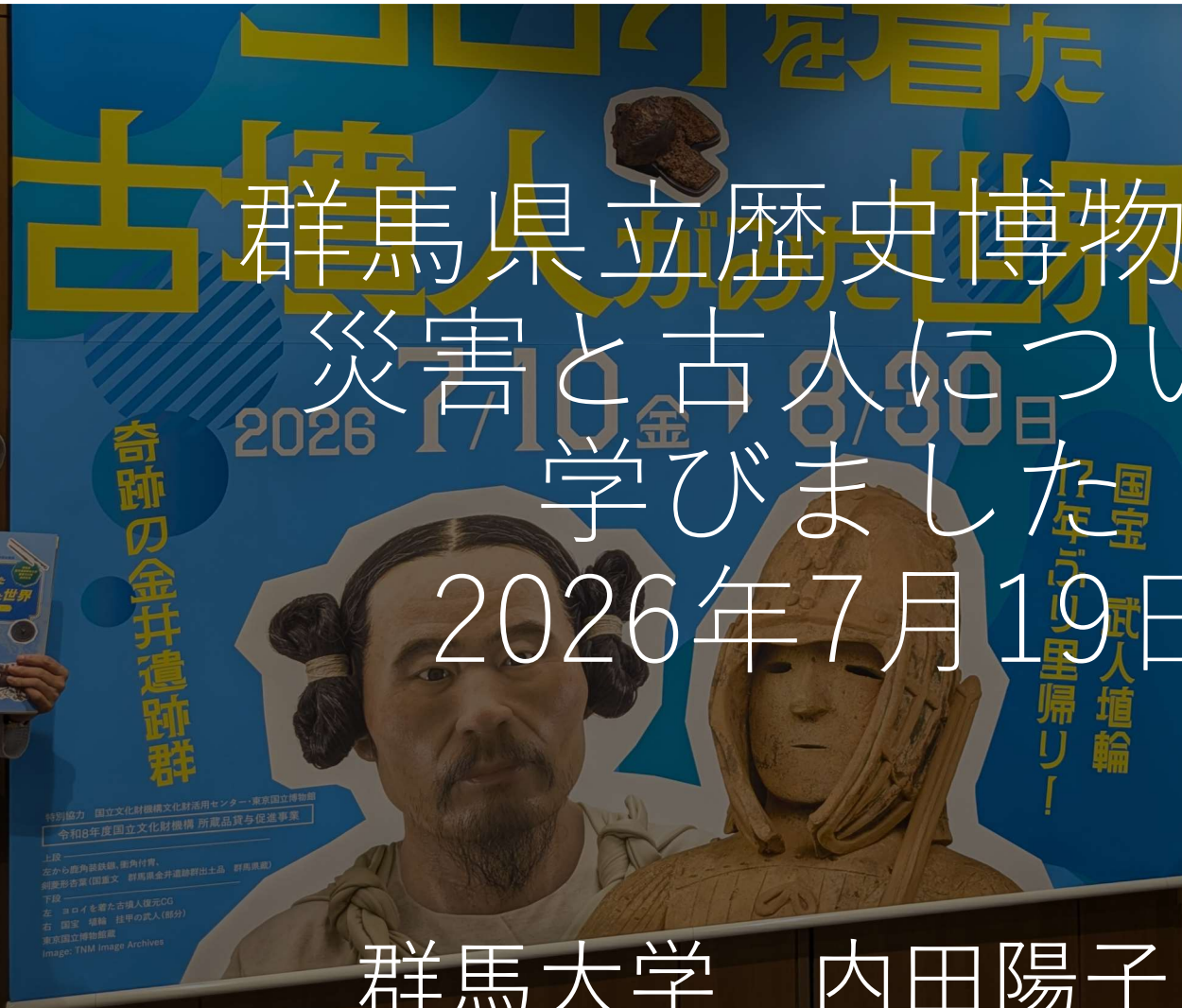
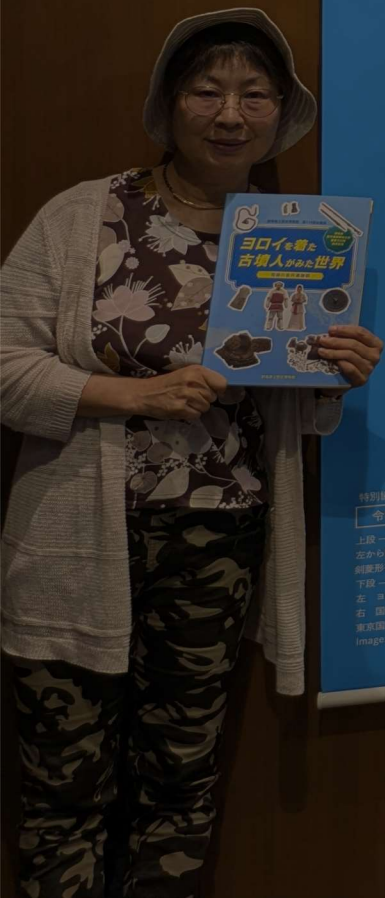


群馬県立歴史博物館で 災害と古人について 学びました 2026年7月19日

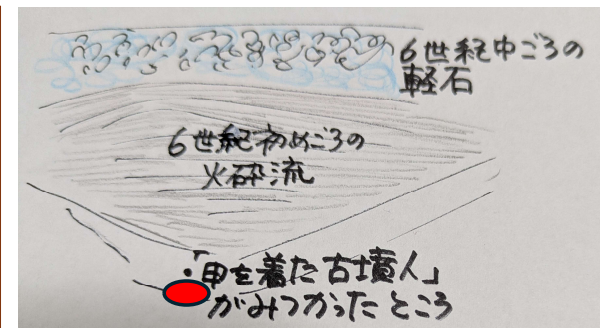


群馬大学 内田陽子

* 観覧及びパンフレットを読んだの感想をまとめました。
防災・減災に役立てていただければ幸いです

「ヨロイを着た古墳人」

- 6世紀初め榛名山噴火で発生した火砕流は広く土地を埋めた
- 2012年「甲を着た古代人」が発掘（現：群馬県渋川市金井）
- 甲冑は鉄製「小札」が多数並び紐で括られていた・小札は鹿の角製も見つかる
- **なぜ、武装していたのか？**



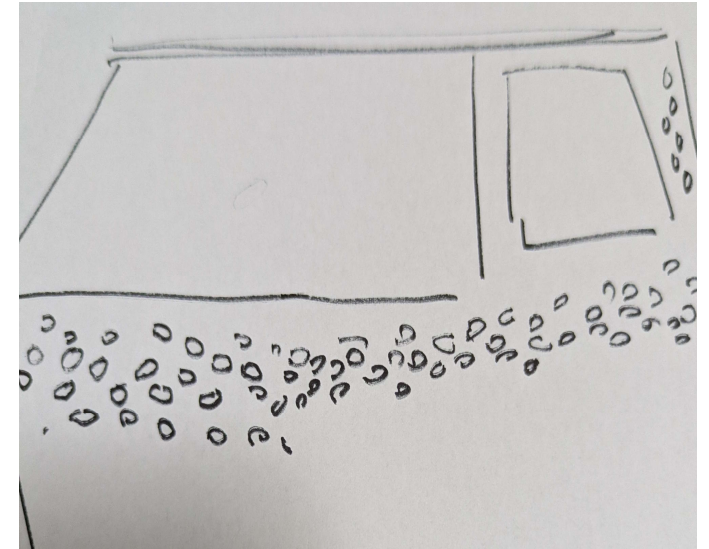
- 鉄製という高度な製法技術をもっていたことにびっくり！ スケッチ内田

古墳人の避難

- 噴火が始まり、火山灰が降り積もり、その上を踏んだ人や馬の避難している足跡や馬蹄跡が発見された
- その多くは西から東に向かい、東側の段丘下へ避難していたと推定される
- 古代から中国や朝鮮、ヤマト朝廷と交流があり、高い文明をもっており、知能も高かったのではないかな？
- 山の神をいつも信仰、観察していたため、避難判断も培われていたのではないかな？



- なぜ、避難できたのか？



スケッチ画：内田

原始：旧石器時代→縄文時代→弥生時代

古代：古墳時代→飛鳥時代→奈良時代→平安時代

中世～：鎌倉時代～とつづく

●群馬県内には古墳がたくさんあり、特に綿貫古墳は国宝が多く発見

○西暦300年頃の浅間山噴火直後に墳丘をもつ古墳が登場した

火山噴火の度に復興していく人々

- 古墳時代3世紀浅間山が噴火
- 6世紀前半と後半には榛名山が大噴火
- 平安時代天仁元年1108年浅間山の大噴火
- このように大噴火のたびに、多くの被害が出る
- しかし、大ピンチのなか先人たちはチャンスにして乗り越えたのであった（復興）

北には赤城山が位置する
過去に地震発生の際に地すべり
も多かったようだ



女堀は渚名氏が荘園に灌漑用の水路をひいた（淵名荘）
スケッチ画：内田陽子



- 例えば、荘園。
- 浅間山大噴火の再開発の機会を
- 逃さず、新田氏などが荘園を
- 切り拓いた

まとめ：防災の観点から

- ・榛名山大爆発の最初の水蒸気爆発で湿り気のある火山灰が降る。

→火砕流等、命を奪う現象はすぐこない・前兆をキャッチ

- ・村人たちは馬をつれて避難していった。そこでは、リーダシップをとる有能な者が存在。この時代は馬の飼育・放牧が一大産業であり、広範囲な地形を把握していた可能性がある。

→広大な視野での地形把握と避難場所の確認、リーダーの育成

- ・首長というべき男性は祈禱をしていたが、山の神に対して武装して対峙、火砕流で亡くなったと考えられている。

→武装は必要ないが災害への身を守る道具や備えは必須

文献：群馬県立歴史博物館、群馬県立歴史博物館第114回企画展、ヨロイを着た古墳人からみた世界一奇跡の金井遺跡群一、令和8年7月10日、p8、9、10、18、138、168、169、178